
シロスウィッチ

Y J

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

シロスウィッチ

【Nコード】

N7538C

【作者名】

YJ

【あらすじ】

青年が目覚めると、見慣れぬ部屋にいた。右腕に嵌められた腕輪と床にあるスイッチの関係は？密室に閉じ込められた青年は無事に脱出することができるのだろうか。

第一話 死のスイッチ

「うわぁー!」

俺は夢から目覚めた。悪夢でも見ていたのかな……起きた瞬間、不思議と夢のことは全て吹き飛び、記憶していない。

俺は汗で濡れた体を起こすと、真つ暗な部屋にいることに気付いた。

「どこだ? ここは……」

自分の部屋では無いのはすぐに分ったが、いつものように電気スイッチに繋がれた紐を掴もうと手を伸ばすと、案の定、俺の手は力なく空振りする。空振りしたその右腕には、時計のような物が嵌められていた。

「なんだこれ?……」

部屋の暗さのため、はっきりと確認はできないが銀のメタリック調の腕輪かと思われる。いろいろな角度から触れてみたが、外せる気配はない。

次第に目が慣れてくると、部屋の様子が薄っすらと見えてきた。おおよそ九畳ぐらいの広さだろうか、正方形の床は板張りで、壁も木材で統一されている。天井はさほど高くは無いにしろ、手の届く高さではない。それよりも周りを見渡すと窓も電気もないし、部屋には木造のドアが1つあるだけだった。

この明かりひとつ無い閑散としたこの部屋は、不気味な風貌で次第に俺の心を暗く、沈黙の闇へと染めていく。人の思考を停止させるような無の空間のようだった。

俺は視界に入るドアを恐る恐る開けることにした。ドアの向こう側が気になり、そっとドアへ耳を添えるが物音ひとつない。

意を決して俺は眉間に皺を寄せ、ゆっくりとドアを開けた。

『ガチャッ』静か過ぎるせいか大げさに音が響く。ドアは半分ぐらい開くと何かに当たって開かなくなった。ドアの向こう側からは気のせいか、ひんやりとした冷たい空気を感ずる。今まで居た部屋とは違う何か不気味な感覚に捕らわれそうになったが、暗闇に吸い込まれるように中に入ってしまった……。

その瞬間だった……。

「おい！ 動くなよ！ 動くな！」

部屋の奥から男の叫び声が響く。その大きな声で俺は体が竦み、ドアノブから手を離れた。俺の頭部は部屋の状況を理解しようとして激しく目線を走らせる。ドアはギーッと音を立てながらゆっくりと閉まっていった……。

「おい！ ドアを閉めるな！」

先程を上回る更に大きな声で、部屋の奥にいる男が叫んだが、時既に遅くドアは力なく閉じられた……。

「バカ！ 閉めやがって！」

「どう言う事だよ！ 動くな！ 閉めるな！ っつて、動かずにドア閉めることなんて出来ないだろ？」

俺は理不尽な指図に思わず大声で言い返していた。

「屁理屈言いやがって」

男の罵声を気に留めず、細目で周りに目を凝らすと、奥の壁に背もたれしている男が薄っすらと見えた。部屋の広さは先程の部屋の広さと同じくらいだが、床と壁は青、白、黒の三色が混ざり合った大理石のような硬い石で出来ているようだ。天井は高すぎるためかその果てを確認する事は出来ない。隣の部屋と同様に明かりになるような物は一切無く、ドアも今開けたドア一つあるだけだ。

俺は不意に下を見ると、うつ伏せに人が倒れているのを発見した。さっきはこの人に引っ掛かってドアが開かなかったのだと納得できる。

「この人は？」

「死んでるよ……」

あつさりとした声で男は呟いた。俺は驚きのあまり心臓が一瞬止まったかのように、ドキッとした。それと共に少なからずの吐き気も催していた。

「死んでるって？」

「その奴もな……」

男は壁際を指差していた。右の壁際にも1人倒れているのが薄っすらと確認できる。良く見るとその男の右腕が途中から無い……。

「おい！ 動くなよ！」

またもや、男が怒鳴る。

「なんだよさつきから、動くな！ って……」

「床を見てみるよ スイッチがあるだろ？」

床を見るといたる所に親指サイズの突起物がある。その突起物も床と同じ材質のようだ。ざっと数えてみて30はあるだろうか……。

「なんだよ？ これ」

「このスイッチを押すと死ぬ……」

「意味がわからないのだが」

「腕輪だよ…… スイッチを押すと爆発する」

俺はその言葉を聞いたら急に心臓の高鳴りを感じた。自分に嵌められた腕輪を見ると、目まいがする。今までは暗闇に隠されていた壁際に横たわる男の姿が脳裏に浮かび、薄っすらとしか見えていないはずの男の無くなった右腕をはっきりとした映像として想像してしまう。

壁際に横たわる男も、おそらくは自分と同じように右腕に腕輪が

あり、その腕輪が爆発したのであろう……。自分の近い未来を見ているようで、死を身近なものに感じ始めていた。自然と冷や汗が頬を伝っていた。嫌な緊張感が自分の内側から体中へ伝播し、気を失いそうになる。

出口の無いこの空間で餓死して死ぬか……。

それともスイッチを押して死ぬとも言っているように俺には思えた……。

第二話 ループ

部屋の奥にいる男は口を開く。

「全てが爆発スイッチでは無い、中には腕輪が外れるスイッチもある……」

俺は意外な言葉に気持ちを持ち直すと同時に疑問を感じた。

「あんたは、なんでそんな事を知ってるんだよ？」

「お前バカか！ 見れば分かるだろ！ そいつとそいつが、試したのさ！」

俺の疑問は、すぐに打ち消された。床に横たわる二人の死因を推理すれば、どうなって死んだかは見当がついた。いくつかのスイッチを二人が押していったのである。

部屋の奥にいる男は二人を指差しているが、その左腕には腕輪が見え隠れしていた。

「あんたは、左腕か……」

「それがどうした？」

「左利きとか？」

俺は安易な質問をした。なにかしら腕輪を外す為の糸口を掴みかけたからだ。

「俺は、右利きだ……」

自分が利き腕だから、利き腕に嵌められてるのかと思ったが違っていた。

「他の人は？」

「壁の奴が右で、ドアの奴が左だ。それがなんか関係あるのか？」

助かる方法を探したかったが、なんのヒントにもならない。壁の側で倒れている男の無くなった右腕、それと自分の足元にうつ伏せに倒れている男の姿を見ると、その生々しさに嘔吐してしまいそうになっていた。未だにゆっくりと血が流れているような錯覚をする。

「どうすりゃいいんだ……」

俺は困惑した。その場に立ち尽くし、無意識に頭を抱え込んでいた。すると男が半ば呆れた感じで話し始めた。

「おもしろい話してやろうか？そこで転がってる二人の話」

そう言うと男は二人の話を始める。俺は手を頭から離すと部屋の男を直視して険しい顔で食い入るように炯眼した。

「その壁の奴、自分の右手で右腕を吹っ飛ばしたんだぜ、そのまま気を失って今頃、出血多量で死んでるわな……フフツ……大抵の人間は腕が吹っ飛ばせばショックで気を失って眠るように死ぬんだ……楽なもんだろ？……ハハッ」

ふざけた口調で話す男の話は、とても笑えるものではない。俺の顔は更に陰しさを増したことだろう。男は続けて話す。

「ドアのところにいる奴はよおー、スイッチ押しで外したのはいいけど、そのまま腕輪を持ってやがって……そのドアを出ようとした時にスイッチ踏んじまったのさっ……踏んだスイッチで自分のが爆発するなんて運もねえーわな。俺のが爆発してもおかしくないのにバカな奴だ……アハハッ……どうだ？ おもしろいだろ？」

男は自分の話でクスクスと肩で笑っているようだった。とても正気とは思えない。死人を小馬鹿にして笑う男の事を俺は人として許せないとも思えた。だが、この忌々しい腕輪を外してもここから出る事は叶わない……。どうすればいいんだ……

俺は自分の頭の中を平静に制御すると、部屋の奥の男に聞いた。

「で？ どうすんの？ 仮にスイッチ押してコレ外したとしても、出口がないよね？」

俺がそう言うと、奥の男は思わぬことを口にした。

「お前、見てないのかよ！ 隣の部屋に出口があったら？」

「ないよ……」

見逃す筈が無い、確かに隣の部屋には、この部屋へのドアしかなかった。確かめに行こうと、ドアノブへ手をかけた時だった。

「バカ！ 待て！ ドアノブから手を離せ！」

咄嗟に男は大声で俺を止めた。怒鳴り声に反応して、俺は無意識に体が竦んだ。俺がドアノブから手を離すと、それを見て男はまた話し始めた。

「教えてやるよ……隣の部屋の壁に ここを爆破しろ って書いてあつただろ？お前それも見てないのか？」

見逃していたのか。壁にそんな文字が……だがそれがなんだと言うんだ！ 出口とは限らない。

「あれが、出口だよ」

出口である事を裏付ける証拠も無いのに、まるでこの設計を自分がしたかのような口振りで男は断言した。

「結局はな……ここで腕輪外してえー、隣の部屋の壁に置きいー、この部屋のスイッチ押しして爆発させてえー、外へ出るうーってことよ……簡単だろ！ え？ 違うか？」

俺を馬鹿にして語る口調は、胡散臭さしか感じさせない。極論、男の話が全て嘘ならスイッチを押しても何も起らない。なんて事も考えられるが、男の話が本当ならこの床のスイッチは言わば、死のスイッチだ……誰だつて押したくはないだろう。横たわる二つの死体が本当である事を訴えているように感じさせる。

「だがな……お前はここで死ぬんだよ。フフツ、俺には分かる……俺は知っている……ハハツ……スイッチを押して……バン！ だ！ さあ押してみろ！」

俺の事を試しているのか、馬鹿にしているのか、既に正気を失っているのか、不気味な口調に苛立ちを覚える。気持ち悪い奴だ。

「ああ！ いいだろう！ 押してやるよ！ だがな！ 爆発するのは、俺のとは限らないぞ！ お前が、バン！ かもな！」

俺は苛立ち、遣るせ無い気持ちの内側から溢れ出していた。俺は平常心を失い、怒号混じりの声を男へぶつけていた。

「押すぞ！ いいな！」

男が俺を止めるのを少し期待していたが、男はニヤニヤと顔を緩めているようだった。

俺は頭に血が上り、上擦る動作で思い切って床のスイッチを押した……。

スイッチは『カチッ』と音を立てて床の高さで固定された。一見したらスイッチがあつた事はわからない。

『ピッ！……ピッ！……ピッ！……』何かしらの機械音が鳴り始めた。まるで時報の様な、一秒間隔程のタイミングで鳴った。

「なんだこの音は……」

直後、俺の視界は白く発光して体がふらついた。見ると自分の右腕が吹っ飛び血が滴り床を真紅に染めていた……

痛みは無かつたが体の自由は奪われ、その場へ倒れ込んでいた……

…。

俺の意識は遠退いていった……。

しかし俺は暗闇の中、力を振り絞り抵抗した……。

悪あがきを繰り返した……。

……。

「はう！……」

……。

「うわぁー！」

夢か……。汗で濡れた体を持ち上げると真っ暗な部屋に俺は居た。

「どこだ？ここは……」

目を凝らすと、ドアが1つあるのが見える……。

まさか…… さっきの……。

ただ夢と違ったのは……。

右腕では無く、左腕に腕輪が嵌められていたことだ……。

第三話 人

「うわぁ！」

夢か……悪夢でも見ていたのだろうか。汗をびっしょりと掻いているが、夢の内容は何も思い出せない。

目を開けると暗い部屋にいた。背中に冷たい床の感触があり、床で寝ていた事に気付いた。

「なんだ？これ……」

左腕に違和感を感じ、寝たままの状態で左腕を上上げて目線に入れると時計のようなブレスレットが嵌められていた。外せる様子は無く、意図的に誰かが嵌めた物と思うと、不気味な感じを受ける。

目が暗闇に慣れてくると、部屋の様子がわかり始めた。床も壁も木造で、広さは九畳ほどの正方形だ。天井は三メートルほどであるうか、ジャンプしても届かないぐらいの高さ。部屋には、壁や床と同じく木製のドアが1つある。

周りを見渡したが、窓も電気も何も無い。この部屋には、物は置かれてないらしい……。

「なんだ？この部屋……」

赤ちゃんが這う様な体勢で四つ這いになり、床を隈なく調べた。部屋を隅々まで調べると片隅に文字が書かれているのを見つけた。

ここを爆破しろ

「ここを爆破しろ?.....」

首を傾げる。文字の書かれた箇所を軽く叩いてみたが他の場所と
なんら変わることもなくコツコツと硬い木の感触しかない。当然、部
屋にこの箇所を爆破する道具など無い。

俺に出来ることと言えば残すは、ドアを開けることぐらいしか残
されていなかった。

気楽な気分でいた訳ではないが、考えてみるとこれは監禁されて
る可能性もあるわけで、
のん気でいられる訳ではない。

目の前のドアだって極端な話、開けたら何が出てくるか、わかっ
たもんじゃない。それに、気になっていたのは、この左腕に嵌めら
れている腕輪だ。

これは、いつたいなんなんだ……。いろいろ腕輪に触れてみたが、
外せない。

気を引き締めて、ドアノブへ手を伸ばした。金物で作られたノブ
は触れると冷たく、『ガチャツ』と音を響かせる。ドアを押し開く
と『ギー』と木製独特な音を発しながらドアは開かれた。

少し開けて中を覗くと、こちらの部屋も暗い。中から何処と無く
冷たい空気を感じる。暗くて中の様子は良くわからないが、ドアを
完全に開き、ゆっくりと様子を窺いながら、中へ入った。

「誰か居ますか?.....」

.....
返事が無い.....。誰も居ないようだ.....。

ドアノブから手を離すと、『ギー』と音を引きずり、ゆっくりドアが閉まる。

目を凝らすと部屋の様子が次第に姿を現した。部屋の広さはさっきの部屋と同じぐらいで、床と壁は大理石のような石で統一されており、青、白、黒の三色が斑模様に使われている。天井は高すぎるためか、その高さを知る事はできない。隣の部屋とは違い、その様相はどこと無く現実離れしており、不気味なものを感じさせる。口ウソクを一本立てれば、儀式にでも使えそうな感じた。

床に目を配ると、いたる所にボタンが突起しているのが見えた。大きさは親指ほどで床と同じ模様のものだ。数は.....四十ぐらいあるだろうか。

「なんのボタンだ? なにかのスイッチか?」

好奇心で1つ押してみた。するとその突起物は『カチツ!』と音を発し、床の高さで止まった。まるで床と一体化し、元の状態へ戻ったように。

『ピッ!.....』

何か無機質な機械音が部屋に反響する。

「なんだ?」

『ピッ！……』

続けてもう一度……。

頭の中は、軽く混乱していた。なにか起きているのか。ボタンを押した事でこの音が鳴っていることは予想できた。

『ピッ！……』

もう一度……。

三回その音は鳴ってみせると、姿を消した。なんだったんだろうか？。無意識に嫌な汗が頬を伝っていた。

あまりにも、自分の理解を超えるおかしな部屋の造り……床の突起物……。

何かを試されているのか？……理解できない……何のために？……

その答えを教えてくれるものは何も無い。

意識的に床のボタンを踏まないように奥へ進み、奥の壁へ背もたれた。この部屋も、床のボタンを除けば、置いてあるような物は何も無いようだった。密室に一人きりの孤独を噛み締めると自然と自分の中から溜息が出た。

「はあー……」

『ガチャツ……ギー……』

一瞬の出来事に瞬時に視線はドアを捉えた。闇の中、ドアが開くのが薄っすらと見える。

そして、人影。

「あの一……」

第四話 爆発

弱々しい男の声がした。恐怖のあまり縮んだ喉頭から無理やり、
か細い声を絞り出している。

「はい……」

哀しい事でもあったかのような貧弱な声を聞くと不意に反応し返
事をした。明かりの無い部屋に居たのだから、気が小さくなるのも
無理もない事なのかもしれない。だが、目に映る男は一体どこから
現れたのだろうか。

「あ！ 人が居る」

打って変わって男は、明るい声を出すと、俺に気付き近づいてく
る。

『カチツ！ カチツ！』足元に気を配ることなく侵入する男は、床
のボタンを押しながら突進してくる。

「ちよ！ ちよ！ ストップ！」

俺は、焦って男を止めた。なにが起こるのか分からないだけにボ
タンを押すのは危険性がある。逆に、何も起らないのかもしれない
のだが……。

俺の体は、なにかを感じていた。妙な不安、第六感が危険を察知
し、危険信号を送っているのを感じ、動悸が激しくなる。

男は二、三個の突起物を踏んでいるようだった……。

『ピッ！ ピッ！……』また、この音だ。床のスイッチによって目覚まし時計を連想させるような機械音が鳴る。なんの音なのだろうか……。

「え？ これなんの音です？」

男は自分のしたことに気が付いていないのか、惚けた感じだ。

「床にボタンがあるから踏まない方がいいよ」

『ピッ！ ピッ！……』一秒ほどの感覚で再び。前例からすると、もう一度ずつ鳴る事が予想できた。

「なにか起こるのですか？」

「さあ……さつき1個押したけど、音だけだったよ。でも、何かのスイッチかもしれないし……」

疑心暗鬼な状態になり、不安にさせられる。だが、その心の変化を感じさせないように、やさしい口調で男に告げた。嫌な予感はあるが、核心を得ている事ではないし、彼を不安にさせる必要はどこにも無いからだ。

『ピッ！ ピッ！……』これが最後の音だろう。なにも起らなければ良いのだが。

『カッチャッ……』何かあったのかと思ったが、これはドアの閉まる音だ。男がドアノブから手を離れたために床を摩るようにして自

然とドアは閉まった。急激に鼓動を早くした自分の心臓が滑稽に思えた。

.....。

部屋の様子を窺い終わると、男は再び弱々しい声で話しかけてきた。俺が察するに、この人の普段の声なのだろう。

「なにも起こらないですね」

「そうみたい.....」

「でも、押さない方が良さそうですね」

「多分.....押さない方がいいかと」

今までは、変化を認知する事は無いが、自分達の知らないところで何かしらの変化をもたらしている可能性は否めない。押しではならないスイッチなのかも.....。床に四十ほどのスイッチがあること自体、常軌を逸している。触らぬ神に祟りなし、と言つ言葉を感じたい。

男は、足元に気を使いながら壁際へ移動し、壁に背中を着けると、滑るようにして床に腰を下ろした。

「質問してもいいでしょうか？」

「どうぞ」

悪い人ではなさそうだし、自分に答えられることなら答えよう

思った。

「この腕輪は、なんですか？」

「行き成りその質問ですか、教えてほしいぐらいです。ごめんなさい、俺にも分かりません……」

男の方を見ると、男は左腕を前へ突き出し、こちらに腕輪を見せているようだった。この人も左腕に。

「そうですか……外へ出る出口とかは無いのですか？」

どうやら俺は、この人の質問に、一つも答えられそうにない。

男と話す事で、俺の心に張り詰めていた糸が緩んでいくのを感じた。長らく人と話してなかったような感覚もあり、初対面の人なのに、そんな事は関係なく人と話す事で落ち着けるものなのだなと思う。

「残念だけどこの事、全然知らないよ。情報量は、あなたと一緒にだと思う……」

「そうですか……」

残念そうに肩を頂垂れた仕種が見て想像できた。

『ガチャツ……ギーー……』 ちよつとした物音にも咄嗟に体が反応する。それほどに部屋は静かだ。ドアの開く音、そして人影を確認した。

「お邪魔しますね」

気さくな感じの男の声がし、ごく普通に部屋へ入ってきた。この人に警戒心はないのか。俺には、不思議に思えた。こんな訳の分からない状況で普通でいられる精神は、よほど器の大きい人間か、ただのバカだと思える。

「ちょっと待っ……………」

『カチッ！…………ピッ！…………』遅かった…………。部屋へ入ってきた男は一步踏み出したその足で、しっかりとスイッチを踏んでいた。

「この音、なに？」

「床にボタンがあるから踏まないで」

今日、二度目の注意だな…………。あと何回注意することになるのだろう。あと何人この部屋へ入ってくるのだろうか…………。部屋中、人だらけになるのだろうか。そう考えると、再び何処からこの二部屋の空間へ入ってきたのかを疑問に感じる。

「なんのボタン？」

答えようにも答えは無く、俺も壁際の男も無言で様子を窺った。

『ピッ！…………ピッ！…………チッ！…………』機械音が三回鳴って見せると、その後に鍵を開けたような音が聞こえた。

「ああ！！ 外れた！！」

壁際の男が飛び起き、腕輪を掲げているようだった。

「見て！！ 見て！！ 腕輪が外れましたよ」

興奮気味に壁際の男は、外れた腕輪を強調している。男の左腕に嵌っていたはずの腕輪は、今は男の右手に握り締められていた。

「おおー！！」

外れているのを見て、思わず感嘆し拍手していた。外れたからと言って、特別のなにか意味があるのか分からないのだが。

「これスイッチじゃないですかね？腕輪のスイッチですよ、きつと押せば腕輪が外れますよ」

興奮混じりに壁際の男は提案した。ドアの側にいる気さくな声の男は、軽快に床のスイッチへ手を伸ばした。

「じゃあ、押してみるよ！ えい！！」

ドアの側にいた男が、床へ肩膝を着け、床に平手打ちをする格好でスイッチを勢い良く押す。

『カチッ！！……ピッ！……』

固唾を呑んで様子を探る……。

『ピッ！……ピッ！……ボン！！』部屋に爆音が鳴り響く。刹那、部屋中に靄煙が視界を塞ぎ、火薬のような酷く強い臭いが蔓延した。

「うああー!!……あ……」

爆音により、違和感のある耳で声を拾うと壁際から叫喚が聞こえ、その声は次第に力を失い薄れていった……。

靄煙に支配され、痛みを覚えていく自分の目を開け、壁際へ視線を送ると男の右腕が無い……。切断面からは赤い液体が大量に床へ流れている……。腕輪が爆発したのだ……。

「大丈夫かよ！」

大丈夫なわけが無いのは、一目見れば誰にでもわかる……。

男はピクピクと小刻みに痙攣し……そのうち動きを失っていった……。

あまりの出来事に、俺もドアの側にいた男も言葉を失い、無言でその惨状に目を奪われ凝視していた。

この時、初めて知ったんだ……。

この床のスイッチは、生死を別ける、死のスイッチだってことを……。

第四話 爆発（後書き）

小説を書いていくにあたり、感想やアドバイスなどいただけたりありがたいです。

文章表現で分り難い点などあったら教えてください。

書き方を模索中で、このまま突っ走って行っていいのか悩み中です

……（・・・、

第五話 生ける屍

真つ暗な部屋に、しばし沈黙が流れる……。

部屋には、俺とドアの側に立つ男が呆然と無言で立ち尽くしていた。

無理も無いだろう……。爆発音と共に男の右腕が吹っ飛ばされたのだから。その男は壁際で横たわり……。自力で動く力は残されていない。もう、生きていないだろうか……。

「爆発しちゃったね」

軽い口調で男は声帯を動かす。この人は平気なのだろうか？ 自分の置かれている状況を把握できているのだろうか。俺は静止していた思考を僅かながらにその活動を開始させた。

爆発しちゃったねって……。自分の耳を疑うが、確かに男はそう言った。

「もう一個、押していい？」

男は少し屈み、軽い感覚で床のスイッチに手を伸ばしていた。

「待て！ 待て！ あんた何を考えてる？ 死にたいのか？」

俺にはこの男の考えていることが読めない。壁際に目を流すとそこには血だらけの男が横向きに倒れ込んでいる。床のスイッチを押

す行為が、自分の死に直結する可能性のある行動である事は理解できるはずだ。普通の人間であれば、押したいなどと思う筈は無い。

「死にたいのか？　なんて聞かれると死にたいのかも……どっちでもいいかな」

男は軽快に軽い口調で答える。その声には危機感は一切感じられない。

「押さないでくれるかな？　俺……死にたくないし……」

この男を刺激しないように、やさしい口調で俺は懇願する。俺は壁に背もたれし、無意識に左腕に着けられた腕輪を見つめていた。これが爆発したことを考えると悪寒が走る。まるで倒れている男が自分の未来の姿のように思えずにはいらなかった。

腕輪が爆発して死ぬ。そんな死に方をこの男は望んでいるのだろうか。

俺の言葉は男の心に届かなかったのか。男は次に押すスイッチを選んでいようだった。男の行動に目を凝らすと右腕に腕輪が見えた。

この人は右腕に……自分とは別の腕に着けられた腕輪を見つめ左と右で何かが違うのか訝しさを抱いたが、当然のようにそこに答えなどはない。

『カチッ！……』この音は、まさか！？……。何度も耳にしてきたこの乾いた音が何の音であるのかはすぐに認識できた。

「押しちゃった」

まるでゲームでも楽しんでいるかのようなふざけた声でおちやらける。この男にとってはゲームなのかもしれないのだが。そう思うと胸に熱いものが込み上げてきた。

「やめろよ!!」

俺の怒号は虚しく部屋に伝播する……。

『ピッ!……ピッ!……ピッ!……ピッ!……』 同じ間隔で刻むこの音が耳につくと動悸が加速し、額に汗が少しずつにじみ出て、湿り気を帯びてきた。そして右手を無くした男の姿が脳裏をかすめる。

……

「ふうー」

未だ心臓は高鳴っていた。少なからずの嘔吐感も胸に覚えた。それに、男への苛立ちも。

「ハズレだったね」

なにを取ってハズレなどと言えるのだろうか。爆発する事が当たりなのか？

「スイッチを押すのをちょっと待ってくれるかな……」

大声を上げ発狂しかねない精神を俺は押さえ込み、再び男を刺激

しないように、やさしい口調で言ってみせた。内心、怒りが脳天を駆け上がり気が狂いそうだ。きつと声は震えていたことに違いないであろう。

危険なのは、この男が機嫌を損ねると何をしでかすかわからないことだ。気分的には、この男を身動きできないぐらいにブン殴りたいぐらいだった。だがそんな暴力行為は好きじゃないし、悲しいことに自分の腕力にも自信が無い。もしかしたら逆にブン殴られて床に倒れるのは自分かも……と想像できる。そのため、この男の気を紛らわすことでもしないと、きつとまたスイッチを押す雰囲気を感じた。

思考を働かせてここで起きた事を思い出してみると、隣の部屋の片隅に ここを爆破しろ って文字が書かれていたのを思い出した。話の流れをスイッチから離そうと思い、文字のことを聞いてみる。

「隣の部屋にさあ、ここを爆破しろって文字あったよね？」

「そんな字あったっけ？」

男は見逃していたようだ。俺は、ここから出られるであろう方法を男に提案した。

「このスイッチで腕輪を外して、隣の部屋へ置いてきて、このスイッチで爆破させるんだよ。きつと、それで出口が……」

不安げに話すその声に男は大した興味を持っていないようだったが、その立ち上がるとドアノブへ手を伸ばしていた。スイッチから離れるのを見ると少しばかり安心できる。

「ちょっと、見てくるわ」

そう言うと男はドアノブを回した。

『ガチャッ！……ピッ！……』驚愕した。驚くべきことに男がドアノブを回すと、アノ音が鳴り始めた……。

「俺は押してないぞ」

男は俺にそう告げたが、嘘ではない。ドアの側から届く位置にスイッチはないからだ。俺も、もちろん押してない……ドアノブか？

『ピッ！……』

2人の時間は止まっていたが、ソノ音は時間を刻む事を忘れない。止まらない……。

『ピッ！……ボン！……』ものすごい爆発音と共に男は煙に撒かれてその場にうつ伏せに倒れた。男の右腕は体の下敷きになり、腕輪が爆発したのかは確認できない。

どうなっているんだ！

「おい！！　おい！！」

「うう……」

大声で呼んだが男は苦しそうな声を上げ、静かに動きを停止させていった。

どこか心の中で安心していた。要危険人物が動かなくなるのを確認して。人が目の前で死ぬのを見て安心した自分の心は腐り始めているのかとも思い、哀しくなった。情緒不安定に涙が頬を伝う。

「もう……出ることできないのか……」

興奮冷めやらぬ中、俺は床に横になり平静を取り戻そうとするが、どうにも出来ないこの状態にすべてを諦めて死を覚悟していた。

ゆっくり目をつぶると、死ぬようにして眠りについた……。

もう……俺は、死んだも同然だ……。生ける屍……。

……

何時間、経過しただろうか……もう、そこに時間の感覚は無かった……。

第六話 ドッベルゲンガー

生々しい臭いが鼻を刺し、目を覚ました。死体が臭いを漂わせてきているのだろうか。軽く目を開けてみるが、そこは眠る前と比べて変化は感じられない。気だるく体を起こし、上を見上げたが真っ暗で天井が存在するのもわからない暗闇。周りは壁、壁、壁……。床にはいくつものスイッチと倒れる二人の男。男達から流れる血は心なし黒く変色し始め、粘り気を帯びている。

壁に背もたれした状態で腕組みをして、考えに耽った。

腕輪を外すためにスイッチを押すしか選択肢はないのだろうか。腕輪が爆発する事は身に染みて理解している。親切にも不親切にも、隣の部屋には ここを爆破しろ などと文字で示されている。予想できるように腕輪を外してソコへ置いて爆発させると言うのである。だが隣の部屋へのドアを開けようとすれば、腕輪は爆発するだろう。その事はドアの側で死んでいる男の背中が無言で語っている。もしかして、上に出口があるのではないだろうか。光が射していないため、高い所に扉があるのではないだろうか、なんてことを想像してしまう。

『ガチャッ……ギー……』

「ん？」

向こう側からドアが開かれていく。すっかり忘れていた。何処から現れているのか分らないが、何時間か前は自分もその中の一人だった。

既に生きることを諦めていた俺に曙光が射したようだった。

今までの疲労のためか倒れそうになる体を起こし壁に背を着け、持ち堪える。

『コト……』ドアの側でうつ伏せに倒れている男にドアが当たり止まった。色々な事が頭の中をよぎり、言葉を失い、なぜかその様子を炯眼していた。

人の外形をした姿がゆつくりと部屋へ入ってくる。入ってくる人影に伝えるべき事はある。スイッチは踏ませない必要があったし、ドアは開けておく必要がある。俺は焦りと混乱で強い口調になっていた。

「おい！！ 動くなよ！！」

『ギー……』ドアが閉まりそうになる……。ドアが閉まったら……もう出られないであろう……。

「ドアを閉めるな！！」

『カッチャツ……』俺の声高な叫びは人影に届かずに扉は閉じられた。俺の精神は壊れそうだ。

「バカ！！ ドアを閉めやがって！！」

俺の感情は高鳴り自然と罵声を浴びせたが、人影は反論した。

「どう言うことだよ！ 動くな！ 閉めるな！ とかって動かずにドア閉めることなんて出来ないだろ」

俺は呆気に取られた。男の声だったが……その言葉には、聞き覚えがある。いつ聞いたのだろうか……それは思い出せない……。

「なんちゃって」

俺はその言葉を聞き、さっきの男を思い出していた。ゲーム感覚でスイッチを押される危険を少なからず感じる。どう言った心理でそんな言葉が出るのか分らないが、どんな状況に置かれているのか、まだ理解していない彼には言えるのかもしれない。

「聞き覚えあつたでしょ？ あんたをここから出してあげるから大丈夫だよ」

男の口調は普通だが、その声は確かに聞き覚えがある……。

俺の声か？……。

部屋の暗さで判らないが姿、形はまるで自分を見ているようで、首を傾げた。

「大丈夫だからスイッチ押ししてみなよ」

男は淡々と事を進めようとしている。口調は温和なものを感じるが、まるで自殺を強要されている様だ。薄っすらと見える男の右腕には、例の腕輪が嵌まっている。

「俺が押すとダメなんだ、あんたが押さなきゃ」

「どつ言つことだよ」

俺は理解に苦しんだ。男の言いたいことがわからない。仮に押しただければ無理やりにも自分で押せばいいのに、なぜ俺が押さなければならぬ？

彼は、ここの事を知っているのではないだろうか。俺をそう思わせるのは、既に確認済みであろう血だらけになっている二人の男を見ても何も言わないからだ。普通の人間なら、この驚愕な映像を目にすれば黙ってはられない筈。普通の人間で無いのなら話は別だが……。

しばらくの間、沈黙が闇を支配すると男は今まで俺に起ったことのすべてを話し始めた……。

床のスイッチは腕輪のスイッチであること……。

壁の側で死んでいる男のこと……。

ドアの側で死んでいる男のこと……。

「まだ俺を信じられない？ スイッチを押しなよ」

俺は、俺の身に起きたことを話されても信用することはできなかつた。俺が黙っていると男はそつと俺に近づき、俺の左腕を自分の頭に置いた。

俺の左腕とは、そう……腕輪の嵌められた腕だ。俺の腕の上に自分の右手を置き、頭に蓋をする様に添えた。その姿はまるで自分の分身を見ているようで、瓜二つだ。

「俺がもう一人?……」

「し……」

男は俺の鼻の前で人差し指を立て、俺の言葉を遮った。

「これでいいでしょ?もし、あんたの腕輪が爆発すれば俺も死ぬ」

完全に話を避けられた。触れてはいけない話題なのだろうか。俺がもう一人……。

俺は神経をスイッチへ戻した。

「いいだろう……押すよ……」

俺には難しい事はわからないのだが、一人ではないのならばと思うこの心理状態はきつと心理学的に説明のつく事なのだろう。悪く言えば道連れがいれば損をするのは自分だけではないのだからと思いつい切った事もできる。ここまできて押す勇気が持て、右手でスイッチを押した……。

『ピッ!……』今まで何度となく耳にしたこの音だが、今では鳴るたびに無意識に反応してしまう。小動物が何かの気配を察知するかのよう。

「大丈夫だから、大丈夫だから」

俺の心は既に半分死んでいた。もう一人の俺は俺の脅えぶりを見てか、しきりに大丈夫と言う言葉を口にする。

「大丈夫……大丈夫……」

男の声は段々と小さくなり、俺の耳元で囁き声に変化していく。その声を聞くと俺は取り乱すことなく、どことなく落ち着けた。

『ピッ！……ピッ！……チッ！……』俺の左腕に何かしらの反応を感じた。腕輪の一箇所が切れ、外せる状態になっている。

「外れた……」

「ほらね」

これは偶然なのか。男の言う通りに俺の腕輪は外れた。右手に腕輪を持ってみると、さほど重くないはずの腕輪だが左腕に活力を蘇らせる。腕輪に自分の左腕の生死を支配されていたのは他でもなく、自由を取り戻した。

「じゃあコレは俺が持つてるね、危ないから……次はドアを開けて」
もう一人の俺へ腕輪を渡して言われるままにドアノブへ手をかけた。

「いいのか？」

もう一人の俺は平気な様子だった。不安や怪訝など微塵も感じさせない。

「ああどうぞ、なにも起こらないから大丈夫」

まるで先のことかわかるかのような素振りだった。自分だけ助ければ言い訳ではないが、俺には危険性は無い。俺は死の恐怖から開放され、次第に平常心を取り戻していく。だが、それとは逆に訝しさが増していくのを感じるが、素直に男の言葉に従いドアノブを回していた。

『ガチャツ…………』アノ音は鳴らなかった…………。

「なんで？　なんで鳴らない？」

俺には不思議に思えたが、それと同時にこの男がここのこと、この部屋のすべてを理解していると思ひ至る。

「俺は全部知ってるから…………隣の部屋にコレ置いて来なよ」

腕輪を手渡され、言われるままに隣の部屋へ入った…………。

なんだろう…………この感じ…………部屋の空気が暖かく感じ、現実へ帰ってきたかのような錯覚をした。隣の部屋が現実ではないという訳ではないのだが、現実離れた部屋の風貌である事は言うまでも無い。

俺は静かに腕輪を置くと、大理石の部屋へ戻った。

ドアを見ると男が自分の靴を片方脱ぎ、閉まらないようにドアを靴で引つ掛けていた。

だが…………。

俺が部屋へ戻ると男の態度は急変した。俺を後ろから羽交い絞め

にしたのだ！

「おい！ なにするんだ！！」

「これからは、俺と運命を共にしてもらおう……ここから先の事は知らないんだ」

尻餅を着く格好で床へ叩きつけられ、ものすごい腕力で後ろから首を絞められている。床に広がる血が俺の衣類に付着した。

「お前がこれから押すスイッチで俺のが爆発したら、お前も道連れだ。置いてきた腕輪が爆発する事を祈るんだな」

「うぐ……」

苦悶する……。自分に首を絞められているようで怨嗟が込み上げてくる。

もう一人の俺は両腕で俺を締め上げてくる……両手で外そうとするが抜けない……。

奴の右腕の腕輪が不気味に見えている……。

「さあ……押せ……」

もう一人の俺は俺の耳元で、囁くように呟いた……。

くそ……。もう声も出ない……。

我慢の限界が近づき俺は無心でスイッチを押した……。

『カチッ！……ピッ！……』 何度となく耳にしてきた音が部屋へ伝播する。

運命を分かつ時が近づいている……。

『ピッ！……ピッ！……』 腕輪がどつこのどつこのではなく、奴の絞め上げで俺の意識は失いかげ、死を覚悟する。自分に殺されるようにやるせない怒りが俺の体を駆け巡る。

審判の時は来た……。

『ボン！……』

爆音が鳴り響いた……。

奴の腕輪が爆発した事がわかったが、呻き声を上げる間も無く、意識は微かなものへと姿を変えた。

奴の右腕と……俺の首は……吹き飛んでしまったのだろうか……。

どんなに力んでも、目を開ける事はできない……。

俺の意識は自分の体から離れていく。

俺の目は閉ざされ、そのまま闇の世界が広がっていった……。

第七話 デジャヴ

「うわー!!」

悪夢を見ていた……。

俺は飛び起き、すぐに自分の首を確認する。飛び起きたと言っても、寝ている状態から上半身を上げたのだが。

「はあ……」

首はついているし、無傷だ……。首が汗に濡れ、夢にうなされていた自分を再認識させられる。

さっきの夢は、なんだったのだろうか……。不気味な暗い部屋に、床のスイッチ……そして爆発する腕輪……。

俺は部屋の電気を点けようと手を伸ばすが、そこにいつもの感覚はなく、空振りした……。

「あれ?…」

電気のスイッチに取り付けられた紐を捜すが、そこには無い。それと共に、ベッドに寝ていない自分に気付き手探ると、床に寝ていたことに気付いた。

それに……左腕にはアノ嫌な感触があった……。アノ腕輪が嵌められている。

まさか、これは……。

自分の見ていた悪夢の部屋に俺は居た……。

愕然とした絶望感があったが、それは大したものではなかった。夢だと思っていたからだ、夢はいつか覚めるものと思い、また床に背を着け眠りについた。

これは、夢なんだと自分に言い聞かせていた……。

意識は遠のき、時間の感覚は薄れていく……。

……

目を覚ますと、また同じ部屋に居た。

確かに眠りについたはずが、目を覚ますと同じ部屋に……。

体を動かすと、そこにはリアルな感覚を感じ、夢なのか、現実なのか分からず錯乱する。

とりあえず、夢で見た　ここを爆破しろ　と言う文字を探すと、同じ位置にあった。

例えこれが夢の世界だったとしても、死にたくは無い……人間なら当然の思いだろう。ここで起きる事は大体理解出来ると勘ぐっていたため若干の疑惑はあったが、ドアノブへ手を伸ばした。

『ガチャツ……』ドアを開けても、閉めなければ危険はないし、床のスイッチも押さなければいい事だ。

「ギー……」ドアを開けて中へ入ると、夢と同じ大理石の部屋だ。だが、奥に人がいるのが見え、夢と違うのがすぐにわかった。

「動かない方がいいよ、床にスイッチがあるから」

部屋の奥から聞きなれた声がした……それは、自分の声だ。

俺が……もう一人いる……。

不気味な感覚に陥るが、自分がもう一人いるシチュエーションは既に経験済み。こんな状況でも不思議と動揺は心の中にしまっておけた。

床に目線を走らせたが、そこに死体は無い。スイッチが至る所にあるだけだ。

俺は、瞬時に夢の出来事を溯った。

部屋に入った二番目の男は、最初に腕輪が外れた男だ。それは、次に部屋へ入ってくる男が踏んだスイッチで外れた出来事を思い出せた。自分だけ助かれれば良い訳ではないが、人間の持つ汚い部分に自分が触れて嫌悪するが、夢の出来事を目の前の男へ話す義理は無い。

若干の物事のずれはあるが部屋の奥にいるもう一人の俺？に気付かれないよう、夢で見た二番目の男を演じることにする。うまくことが運べば、コノ爆弾は外れるはずだ。

ドアが開けっ放しだったのに気付き、奥にいる男に気付かれぬよ

うっそうとそりとドアを閉め、俺は壁際へ移動した。

壁際にいた男は弱々しい声で、確かこう言ったんだ。

「質問してもいいでしょうか？」

「どうぞ」

思ったとおりの返答だ。続けて俺は夢を再現した。

「この腕輪は、なんですか？」

「行き成りその質問ですか、教えてほしいぐらいです。ごめんなさい、俺にも分かりません……」

思い通りの回答に、段々と確信が持ててきた。

もう少しで、この腕輪は外れる……筈だと。

再び夢を再現し、俺は夢で見た男を演じ続けた。

「そうですねか……外へ出る出口とかは無いのですか？」

「残念だけどこの事、全然知らないよ。情報量はあなたと一緒にだと思っ……」

「そうですねか……」

この爆弾が外れる時は、すぐそこまで迫っている……。二人の俺はその後、沈黙を守って様子を窺った。

『ガチャッ……ギー……』 ドアが開き、人が入ってきた。俺はドアが閉まらないように自分の靴を片方脱ぎ、ドアに挿んだ。

「お邪魔しますね」

自分の思い通りに再現されているこの空間に、思わず笑いをこらえている自分を感じた……。

全て、うまくいつている。

「ちょっと待つ……！」

部屋の奥にいる男が叫んだが、男はスイッチを踏んでいる……夢と同じ展開だ。

『カチッ！……』

もう少しだ……。

もう少しでこの腕輪は外れる……。

『ピッ！……』

「この音、なに？」

「床にボタンがあるから、踏まないで」

「なんのボタン？」

もう少しの我慢だ……。

固唾を呑んでその時を待った……。

『ピッ！……ピッ！……チッ！……』音をたてて腕輪は俺の腕から外れた。なんの焦りも無かった。冷静に肩の荷が下りたのだ。

「やった！」

本気でうれしかった。もう夢を再現する必要はない、そんなことをすれば今から死ぬのは自分であることは知っている。夢を思い出せばすぐにわかった。

「なにがあつたんだ？」

「腕輪が外れたんだよ」

俺がそう伝える前に、ドアの側にいる男は次のスイッチを押していた。

『ピッ！……』

ドアの側の男は、俺の腕輪が外れるのを見て、瞬時にスイッチを押しているようだったが、そうではない……あまりにもタイミングが早すぎる。

「なんで押すんだよ！」

俺はドアの側の男へ怒鳴ったが、男に怯んだ様子は無い。

「お前の腕輪、外れてんじゃん。床のボタンは、腕輪を外すスイッチでしょ？」

『ピッ！……』

男は惚けていた……俺が焦るのを見て笑っていた。この男は俺の腕輪が爆発するのを知っているのか？

俺は分かっている。自分の腕輪が爆発するがすぐそこまで迫っている事を。

ただ、この腕輪を放せばいいだけのこと。

『ピッ！……』

決して難しいことではない……。

俺は素早く隣の部屋へ駆け込み、文字 ここを爆破しろ 目掛けて腕輪を放り投げようとした。

だが……俺の体は硬直し、右手で腕輪をありったけの力で強く握り締めている……。

くそ！……焦り、緊張、憎悪、嫌悪、怨嗟、苦悶、あらゆる感情が体から溢れ出し、俺の精神は崩壊した。

手が放せない！

『ボン！……』俺の右腕は吹き飛んだ。爆発と煙に包まれ、その場に力なく崩れ落ちる……。右腕には言葉にならないほどの激痛が駆

け巡り、全身は焼けるほどの熱を発した。腕からは煌々と血が流れ
枯渇する事を知らない。体の力は抜けていき、徐々に自分の体では
なくなっていく。腕から全ての生気が抜けていつている……。

俺の心は闇に支配され、地底深くへ沈めていった……。

俺は目覚める事をしきりに嘆願したが、二度と目を覚ますことは
無かった……。

子供たちの声

「ねえ　ねえ　シロスウィッチって知ってる？」

「知らにゃい」

「夢にうなされてる人にね　耳元でシロスウィッチ、シロスウィッ
チ、シロスウィッチ……って何度も言っていると起きなくなっちゃう
んだって……。

「それでね……そのまま夢に、うなされて死んじゃうんだって……
……」

「シロスウィッチってなに？」

「知らな～い　……この話には、まだ続きがあつてね……その人の
お葬式に行くとな　……　死んじゃった人の腕が片方だけ、無くなっ
てるんだって……。

シロスイッチ

夢の世界は、自分の知らないうちに現実へとその姿をかえる……。

終

第七話 デジャヴ（後書き）

最後まで読んで頂いた方ありがとうございます。

今頃ですが、題名のシロスウィッチってのは、死のスイッチをもじっただけで深い意味はありません。感想やアドバイスなどいただけたらありがたいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538c/>

シロスウィッチ

2009年7月3日19時02分発行